

NEC

WebOTX Application Server Express V12.1
Processor License

お試し版

インストールガイド(Windows)

ごあいさつ

日頃より弊社製品をご愛顧いただき、まことにありがとうございます。このたびは、お客様にご利用いただく「WebOTX Application Server Express V12.1 – お試し版」(以降、WebOTX AS Express お試し版 と記載します)のインストール方法や利用上の注意等について説明させていただきます。

ダウンロードしていただいたソフトウェアは、インストール後 **365 日間** 使用可能な「お試し版」です。
インストールしてから 365 日を超えると各種機能が動作しくなくなります。

本書は、WebOTX AS Express お試し版のインストールの内容を中心に構成されています。お試し版をお使いになる前に、必ずお読み下さい。

以下からの説明では、WebOTX Application Server を「WebOTX AS」と省略して表現します。

WebOTX は日本電気株式会社の登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows Server、Internet Information Services、SQL Server、Internet Explorer、Microsoft Edge は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標です。

Windows の正式名称は、Microsoft Windows Operating System です。

Oracle と Java は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

MySQL は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

DataDirect、DataDirect Connect は、Progress Software Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

IIOP は、米国 Object Management Group, Inc. の米国またはその他の国における商標または登録商標です。

Intel は、アメリカ合衆国およびまたはその他の国における Intel Corporation の商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標もしくは商標です。

PostgreSQL は、PostgreSQL の米国およびその他の国における商標です。

Firefox は、Mozilla Foundation の商標または登録商標です。

Google Chrome、Chromium は、Google Inc. の商標または登録商標です。

MariaDB は、MariaDB Corporation Ab 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

Amazon Web Services、“Powered by Amazon Web Services”ロゴ、およびかかる資料で使用されるその他の AWS 商標は、米国その他の諸国における、Amazon.com, Inc. またはその関連会社の商標です。

Eclipse および Jakarta は、米国およびその他の国における Eclipse Foundation, Inc. の商標もしくは登録商標です。

This product includes software developed by the Apache Software Foundation
(<http://www.apache.org/>).

This product includes software developed by the OpenSSL Project for use in the OpenSSL Toolkit.
(<http://www.openssl.org/>).

その他記載されている会社名、製品名には各社の商標のものもあります。

目次

1. はじめに	1
プロファイルについて	1
諸元制限	2
2. 動作環境	3
ソフトウェア要件	3
必要リソース	6
3. インストール	8
インストール前の作業	8
インストール	11
環境構築	19
環境構築後の作業	32
追加インストール	39
4. アンインストール	43
アンインストール前の作業	43
アンインストール	43
アンインストール後の作業	46
5. 注意制限事項	49

1. はじめに

WebOTX AS Express のお試し版をダウンロードいただきありがとうございます。WebOTX Application Server は Web システムに簡単にアプリケーションを追加した小規模なシステムから、高い信頼性と高いトラフィックに耐える業務アプリケーションを安全に実行できる大規模な基幹業務向けのシステムまでトータルなソリューションを提供するサービス基盤です。

WebOTX Application Server 製品には、システム形態、規模に応じて次のタイプがあります。

- **WebOTX Application Server Express**

Java 標準構成のアプリケーションサーバです。

Web システムに、業務アプリケーションを Java Servlet/JavaServer Pages (JSP)、Web サービス・エンドポイントとして追加する機能を含んでいます。

また、EJB や JMS を利用した業務アプリケーションを構築することも可能です。

- **WebOTX Application Server Standard**

厳しい信頼性要求にも応える本格的な高信頼機能を備えた、アプリケーションサーバの標準モデルです。業務に障害や、高負荷が発生しても、他の業務は影響なく継続可能です。

WebOTX Application Server Express の提供機能を含んでいます。

このお試し版は、Express を提供します。Express は、「Servlet や JSP を用いた Web システムから EJB などの Jakarta EE をベースとした本格的な Web 業務システムを短期間で構築したい」といった要望に最適な機能を提供する製品です。

プロファイルについて

WebOTX Application Server Express Processor License は非コンテナ上の WebOTX AS Express のフルプロファイル(Windows/Linux)のみ利用可能です。

※マイクロサービスプロファイル(Windows/Linux)は V12.1 で提供されません。

フルプロファイルとは Jakarta EE の全ての機能を提供するプロファイルであり、V10.3 以前と同じ利用形態です。フルプロファイルのインストールに関しては、本ドキュメントを参照してください。

諸元制限

WebOTX Application Server Express はエントリ・モデルのため、以下の諸元制限があります。

- 合計コア数

利用可能なマシンは、最大 2CPU ソケットかつ全 CPU のコア数合計最大 12 コアまでの制限があります。

仮想環境で利用し、マシンの H/W 構成が特定できない場合は、1 仮想マシンあたり最大 12 コアまでの制限となります。

1 ライセンスにつき 2 コアまで利用可能です。

物理マシンの場合は対象マシンに搭載されている全 CPU が対象となり、クアッドコア CPU とヘキサコア CPU は共に 2 個までとなります。

仮想マシンの場合、インストール対象の仮想マシンに割り当てるコア数の合計値は 12 個までとなります。

(例 1) 対象マシンが物理マシンかつクアッドコア CPU を 2 個搭載

「4 (コア) x 2 (個) = 8 コア」 -> 登録するライセンス数 4

(例 2) 対象マシンが物理マシンかつヘキサコア CPU を 2 個搭載

「6 (コア) x 2 (個) = 12 コア」 -> 登録するライセンス数 6

(例 3) 対象マシンが仮想マシンかつ 12 コア割り当て

「12 コア」 -> 登録するライセンス数 6

- 同時処理数

クライアントからのリクエストの同時処理数(処理スレッド数)は 100 本までの制限があります。この制限は、HTTP セッション数や、利用可能なクライアント数の上限ではありません。ある時点で同時にリクエスト処理を行う上限です。

対象の設定値は、「アプリケーションサーバ・スレッドプール thread pool – http-thread-pool」のスレッドプール最大値(max-thread-pool-size)です。

- セッションレプリケーションの共有台数

負荷分散構成で複数台のサーバでシステムを構成する場合、セッションレプリケーション機能によりセッション情報を共有できます。このセッションレプリケーションでセッション情報を共有は、4 台までの制限があります。

対象の設定値は、「アプリケーションサーバ・Web コンテナ」の JNDI サーバの URL(session-replication-jndi-url)です。

(注) 一台に複数ドメインを作成した場合には、それぞれのドメインを 1 台のサーバとみなします。

2. 動作環境

ソフトウェア要件

WebOTX Application Server Express でサポートするオペレーティング・システム(OS)と、利用するために必要な関連ソフトウェアを説明します。

- オペレーティング・システム (OS)

動作対象の OS として、次の種類をサポートします。

<32 ビット OS>

サポートされません。

<64 ビット OS>

- Windows Server® 2022 Datacenter(※1,2)
- Windows Server® 2022 Standard(※1,2)
- Windows Server® 2019 Datacenter (※1, 2)
- Windows Server® 2019 Standard (※1, 2)
- Windows Server® 2016 Datacenter (※1, 2)
- Windows Server® 2016 Standard (※1, 2)

(※1) Server Core をサポートします。

(※2) Nano Server としてインストールした場合は未サポートとなります。

- Java SE Development Kit

WebOTX システムは、実行時に Java™ Platform, Standard Edition の SDK を必要とします。サポートする SDK バージョンは次のとおりです。

- Oracle Java SE Development Kit 11 (11.0.24 以降) LTS 版(※1)
- Oracle Java SE Development Kit 17 (17.0.12 以降) LTS 版(※2)
- Oracle Java SE Development Kit 21 (21.0.4 以降) LTS 版
- OpenJDK 11 (11.0.24 以降) (※3, 4)
- OpenJDK 17 (17.0.12 以降) (※3, 5)
- OpenJDK 21 (21.0.4 以降) (※3, 6)

※1. Java SE Subscription(有償)契約ユーザのみ取得可能

- ※2. 17.0.13 以降は Java SE Subscription(有償)契約ユーザのみ取得可能
- ※3. 各ディストリビュータからリリースされている OpenJDK をサポート
- ※4. Eclipse Temurin JDK with Hotspot 11.0.24(2024/7 リリース版を対象)について製品出荷時に評価済み
- ※5. Eclipse Temurin JDK with Hotspot 17.0.12(2024/7 リリース版を対象)について製品出荷時に評価済み
- ※6. Eclipse Temurin JDK with Hotspot 21.0.4(2024/7 リリース版を対象)について製品出荷時に評価済み

適用する JDK バージョンには、次の注意・制限事項がありますのでご注意ください。

- WebOTX 製品は、Oracle 社製の Java SDK をバンドルしていますが、Java SDK 自身の保守は行っていないので、ご了承ください。

● Web ブラウザ

WebOTX 実行環境を管理するために Web ブラウザベースの管理ツールとして、運用管理コンソールを提供しています。サポートする Web ブラウザは次のとおりです。

- Firefox 76 以上
- Google Chrome 81 以上
- Chromium 版「Microsoft Edge」88 以上

必要とするプラグインはありません。

● 対応ソフトウェア — Web サーバ

本製品は次の Web サーバに対応しています。

- WebOTX Web サーバ 2.4.62 以降(*1)
- Apache HTTP Server 2.4.62 以降
- Internet Information Services (IIS) 10.0(*2)

*1 WebOTX Web サーバとは Apache HTTP Server をベースにした Web サーバで、WebOTX AS にバンドルされています。バンドルされているバージョンの詳細はインストールに利用する WebOTX Media の添付ドキュメントを参照してください。

*2 64 ビット Windows OS で 32 ビットのアプリケーションを実行するように構成した IIS はサポートしません。

● 対応ソフトウェア — データベース・サーバ

WebOTX AS がサポート対象とするデータベース・サーバは、プログラミング言語、オペレーティング・システムによ

って次の製品に対応しています。

- Java

WebOTX AS は、JDBC 2.0 から JDBC4.3 の仕様に準拠している JDBC ドライバを介して任意の DBMS への接続をサポートするように設計されています。アプリケーションが独自の方式でデータベース・サーバに接続、または WebOTX AS が提供する JDBC データソースによる接続、あるいは、WebOTX の Transaction サービス機能と連携した JTA トランザクションを使用する場合には、データベース・サーバ製品にバンドルされる JDBC ドライバを入手して、セットアップしなければなりません。

WebOTX AS では以下の JDBC ドライバについて動作確認を行っています。

JDBC ベンダー	JDBC ドライバ・タイプ	サポートするデータベース・サーバ	備考
Oracle	Type2、4	Oracle Database 11g Release 2 (11.2.0.4)	
		Oracle Database 12c Release 1 (12.1.0.1.0)	
		Oracle Database 12c Release 1 (12.1.0.2)	
		Oracle Database 12c Release 2 (12.2.0.1.0)	
		Oracle Database 18c (18.3.0)	
		Oracle Database 19c (19.3.0.0.0)	
		Oracle Database 19c (19.4.0.0.0)	
		Oracle Database 19c (19.7.0.0.0)	
		Oracle Database 19c (19.9.0.0.0)	
		Oracle Database 19c (19.15.0.0.0)	
		Oracle Database 19c (19.19.0.0.0)	
		Oracle Database 19c (19.24.0.0.0)	
		Oracle Database 21c (21.3.0.0.0)	
		Oracle Database 21c (21.10.0.0.0)	
		Oracle Database 21c (21.15.0.0.0)	
Oracle UCP	Type 2、4	Oracle Database 11g Release 2 以降、Oracle Database 21c まで	
Microsoft	Type 4	Microsoft SQL Server 2014	
		Microsoft SQL Server 2016	
		Microsoft SQL Server 2017	
		Microsoft SQL Server 2019	
		Microsoft SQL Server 2022	
PostgreSQL	Type 4	PostgreSQL 8.1 (JDBC ドライバ 8.1 Build 401) ~	

Development Group		PostgreSQL 17.0(JDBCドライバ 42.7.4)	
Apache Derby	Type 4	Apache Derby 10.2.2～10.11.1.2	
Amazon RDS MariaDB	Type 4	MariaDB 10.0.24(JDBCドライバ MariaDB connector/J 2.0.2) ～ MariaDB 11.4.3(JDBCドライバ MariaDB Connector/J 3.4.1)	
Amazon RDS Aurora MySQL	Type 4	Aurora(MySQL)- 5.6.10a (JDBCドライバ mysql-connector-java-5.1.42) ～ Aurora MySQL 3.07.1(compatible with MySQL 8.0.36)(JDBCドライバ mysql-connector-j-9.1.0)	
Amazon RDS Aurora PostgreSQL	Type 4	Aurora PostgreSQL(Compatible with PostgreSQL 14.3) (JDBCドライバ 42.4.0)～ Aurora PostgreSQL(Compatible with PostgreSQL 16.4)(JDBCドライバ 42.7.4)	

その他の製品についても、例えば MySQL Connector/J 5.0 など、JDBC 2.0 から JDBC4.3 の仕様に準拠している JDBC ドライバであれば、WebOTX AS と連携して使用することができます。ただし、十分な評価を行ってください。

● バッチサービス

バッチサービスのジョブリポジトリの対応データベースは以下のとおりです。

JDBC ベンダー	JDBC ドライバ・タイプ	サポートするデータベース・サーバ	備考
Oracle	Type2、4	Oracle Database 19c (19.9.0.0.0) Oracle Database 21c (21.3.0.0.0)	
PostgreSQL Development Group	Type 4	PostgreSQL 13.1 (JDBCドライバ 42.2.18)～ PostgreSQL 15.8 (JDBCドライバ 42.7.4)	

必要リソース

ここでは、インストールするために必要な固定ディスク空き容量と、インストール中、およびインストール後の初期動作に必要なメモリ容量について説明します。

下記に示すハードディスク容量は、選択インストール可能な機能やプロダクトを全てインストールした場合を表しています。ただし、JDK などの関連ソフトウェアのディスク消費量は含まれていません。

メモリ容量は、インストール時に既定値を選択して動作させた場合を表しています。

- 必要ハードディスク容量
 - 300MB
- 必要メモリ
 - 最小 1GB、推奨 1.5GB 以上

3. インストール

V10 からインストールと WebOTX のドメインやサービスを作成する環境構築に関して、連続実行と分離実行を選択することが可能となりました。

また、再インストールを行わずに、環境構築のみ再実行することも可能です。

※再実行時は、既に存在している管理／ユーザドメインを削除後に再作成します。

インストール前の作業

インストール時の注意事項を以下に示します。

- WebOTX 製品は同一バージョンの複数位置へのインストールはできません。したがって、インストール済の WebOTX のインストール先を変更する場合は、WebOTX のサービス群を停止した後にアンインストールを行なってください。
- インストール作業は、必ず **Administrators** グループに所属した管理者権限があるユーザで行わなければなりません。管理者権限があるユーザでログインしていることを確認してください。
Built-in Administrator ユーザで行うか、管理者権限のあるユーザでも「管理者として実行」によりインストールを起動してください。

Windows 版のインストーラはレジストリへの書き込みを行います。以下のレジストリキーに **SYSTEM** ユーザ及び **Administrators** グループの書き込み権限が設定されていることを確認してください。

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥NEC (*1)

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC (*1)

*1 存在しない場合は上位のレジストリキーに権限が設定されていることを確認してください。

- WebOTX のインストール後に、環境構築ツールの内部で Java を使って環境構築を行います。そのため、WebOTX をインストールする前に、JDK がインストール済みかを確認してください。まだ JDK がインストールされていない場合は、必ず WebOTX インストール前に JDK をインストールしてください。
- WebOTX をインストールする前に、Microsoft Internet Information Services (IIS) や Apache HTTP Server などの他の Web サーバが起動している場合、WebOTX で使用されるポート番号などの設定内容が重複する恐れがあります。この問題を回避するために、一旦 Web サーバを停止するようにしてください。停止方法などはインストールされている各 Web サーバのマニュアルを参照してください。
- Web サーバと Web コンテナとの連携について

静的コンテンツの処理と動的コンテンツの処理を別マシンや別プロセスに分離できるよう、WebサーバとWebコンテナは別々のプロセスで動作させることが可能です。その場合、Webサーバの種類とWebコンテナとの構成

について以下のとおり決定しておく必要があります。

Step 1. トポロジの決定

Webコンテナ(Webアプリケーションの実行環境)が動作するWebOTX Application ServerとWebサーバを同一マシンで構成することを「共存トポロジ」と呼びます。また、WebOTX Application ServerとWebサーバを異なるマシンで構成することを「分離トポロジ」と呼びます。

Step 2. 利用するWebサーバの決定

以下のWebサーバを利用することが可能です。連携可能なWebサーバの詳細は、「2. 動作環境」の「ソフトウェア要件」のWebサーバを参照してください。

- WebOTX Webサーバ
- Apache HTTP Server
- Microsoft Internet Information Services (IIS)
- 内蔵Webサーバ

Step 3. アプリケーションを配備するプロセスの決定

【内蔵Webサーバを利用する場合はスキップしてください】

アプリケーションを配備するプロセスを決定します。

- ・WebOTX Application Server Expressの場合
対象はエージェントプロセスのみです。
- ・WebOTX Application Server Standardの場合
対象はエージェントプロセスまたはプロセスグループです。

Step 4. AJPリスナポート番号の決定

【内蔵Webサーバを利用する場合はスキップしてください】

Step 3.で決定したプロセスについて、Webコンテナとの連携に使用するAJPリスナのポート番号を決定します。

既定値は以下のとおりです。

- ・エージェントプロセスに配備するアプリケーション用のAJPリスナポート番号
8099
- ・プロセスグループに配備するアプリケーション用のAJPリスナポート番号
20102

Step 1と2で決定した結果を以下の表に当てはめる事で、必要となる作業を示す行が確定します。「WebOTX ASマシン」列、「Webサーバマシン」列それぞれで作業が必要です。

トポロ	利用する Web サーバ	作業手順
-----	--------------	------

シ		WebOTX AS マシン	Web サーバマシン
共存	WebOTX Web サーバ	(1) インストール:WebOTX AS (2) 環境構築:共存トポロジで実行(*1)	—
	Apache HTTP Server	(1) インストール:Apache HTTP Server (2) インストール:WebOTX AS (3) 環境構築:共存トポロジで実行(*1)	—
	IIS	(1) インストール:IIS (2) インストール:WebOTX AS (3) 環境構築:共存トポロジで実行(*1)	—
	内蔵 Web サーバ	(1) インストール:WebOTX AS (2) 環境構築:共存トポロジで実行(*1)	—
分離	WebOTX Web サーバ	(1) インストール:WebOTX AS (2) 環境構築:分離トポロジ(Web コンテナ)で実行(*1)	(1) インストール:WebOTX AS (*3) (2) 環境構築:分離トポロジ(Web サーバ)で実行(*2)
	Apache HTTP Server	(1) インストール:WebOTX AS (2) 環境構築:分離トポロジ(Web コンテナ)で実行(*1)	(1) インストール:Apache HTTP Server (2) インストール:WebOTX Client(*4) (3) 環境構築:Web サーバ連携を実施(*2)
	IIS	(1) インストール:WebOTX AS (2) 環境構築:分離トポロジ(Web コンテナ)で実行(*1)	(1) インストール:IIS (2) インストール:WebOTX Client(*4) (3) 環境構築:Web サーバ連携を実施(*2)

[WebOTX ASマシン]

(*1) 既定値以外を利用する場合、ユーザドメインのAJPLISNAのポート番号の入力が必要。

[Webサーバマシン]

(*2) 既定値以外を利用する場合、接続先のWebOTX ASマシンのAJPLISNAのポート番号の入力が必要。

(*3) Webサーバとして動作するマシンにWebOTX ASのライセンスが必要。

(*4) Webサーバとして動作するマシンにWebOTX ASのライセンスは不要。WebOTX Clientのインストールと環境構築はWebOTX Mediaのインストールガイドを参照してください。(WebOTX ClientのWebサーバ連携機能に関するサポートOSはWebOTX ASに準拠します)

● ホスト名の設定 (hosts ファイルの記述)

インストール対象OSのhostsファイルに正しくホスト名が定義されていない場合、ホスト名の解決に失敗し、インストール中にエラーが発生する可能性があります。hostsファイルを参照し、正しいホスト名が定義されていることを確認してください。

また、ローカル・ループバック・アドレス「127.0.0.1」に対してはローカルホスト以外のホスト名を設定しないでください。RMI通信によるリモート接続が行えず、WebOTX Administrator製品に同梱される統合運用管理ツールから接続できません。

また、ローカルホストのエイリアス名に、”felix.extensions”を追加してください。

● 例

127.0.0.1	localhost localhost.localdomain felix.extensions
10.18.111.1	remote001

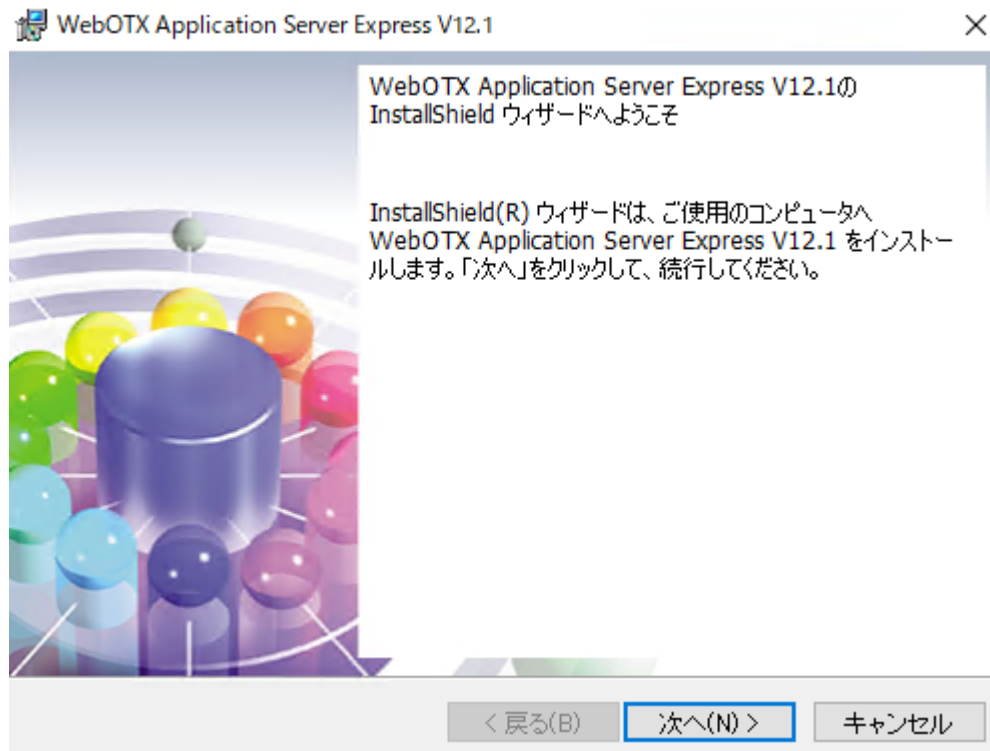
インストール

(1) インストーラの起動

ダウンロードした「WebOTX AS Express V12.1 お試し版」のファイル、「OTXEXP121.exe」を Built-in Administrator ユーザか、管理者権限のあるユーザでも「管理者として実行」によりインストーラを実行してください。

(2) [WebOTX AS Express のインストールへようこそ] 画面

Windows インストーラが起動し「インストールの準備中」というメッセージのあとに次の画面が表示されます。「次へ」ボタンを押してください。



(3) [ライセンス情報] 画面

「ライセンス登録画面表示」ボタンを押すとライセンス登録用のダイアログが表示されます。



テキストボックスに、「**NOREGISTEXP**」(カッコは含みません)を 1 個入力します。情報に間違いがなければ「次へ」ボタンを押してください。



「入力済ライセンス数」が 1 となっているのを確認後、「次へ」ボタンを押してください。

(4) 【セットアップ種別】画面

セットアップ種別を選択し、「次へ」ボタンを押してください。

既定値でインストールを行う場合、「デフォルト セットアップ」を選択してください。→ (8)に進んでください。

インストールするオプションを選択する場合、「カスタム セットアップ」を選択してください。→ (5)に進んでください。



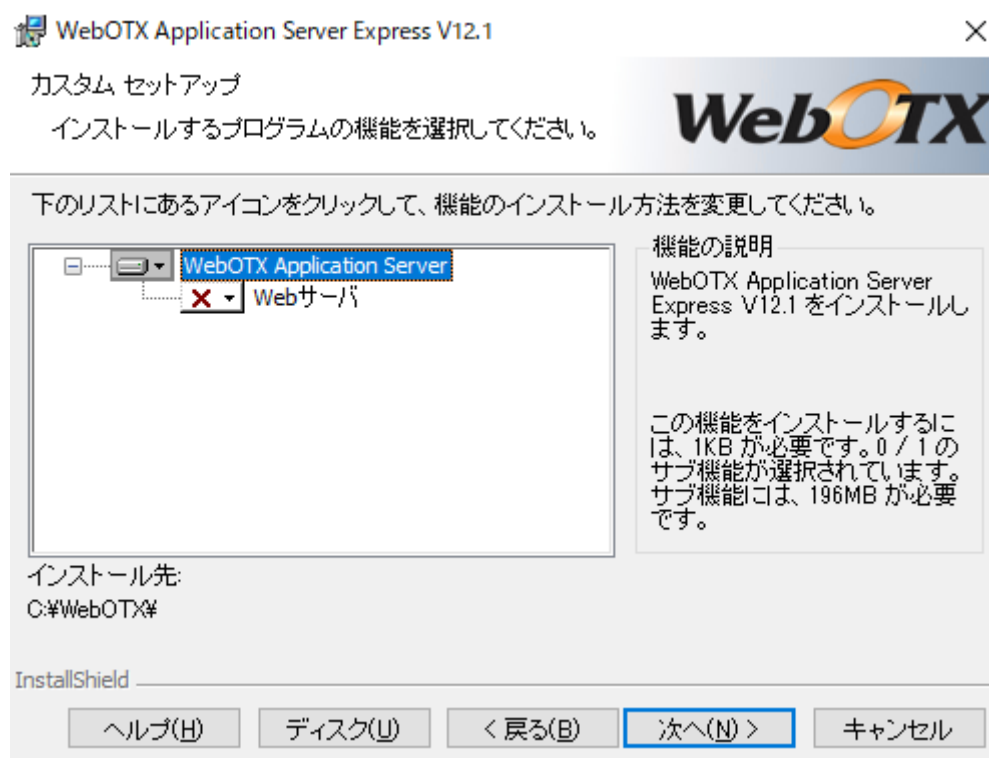
(5) 【インストール先フォルダ】 画面

インストール先フォルダを決定後、「次へ」ボタンを押してください。インストール先フォルダを変更する場合には「変更」ボタンを押してください。インストール先フォルダにはマルチバイト文字を含むパスを指定することはできません。また、他の WebOTX 製品がすでにインストールされている場合、同じフォルダが表示されます。



(6) 【カスタムセットアップ】 画面

インストールする機能を選択後、「次へ」ボタンを押してください。



リストにある各アイコンの意味は次のとおりです。

アイコン	説明
Web サーバ	WebOTX Web サーバ(Apache HTTP Server 2.4.xx ベース)をインストールします。(*1,2) 既定値でインストールされません。

*1 WebOTX 内蔵型の Java ベースの Web サーバを使用する場合や、外部の Web サーバ、例えば、Microsoft Internet Information Services (IIS)などと連携動作させる場合には、「Web サーバ」を選択する必要はありません。Web サーバとの連携設定は環境構築にて行います。

*2 バージョンの詳細("xx")は WebOTX Media の添付ドキュメントを参照してください。

(7) 【パッチ適用オプション】 画面

お試し版はサポートを提供しないため、パッチを入手することが出来ません。「次へ」ボタンを押して次画面に進んでください。



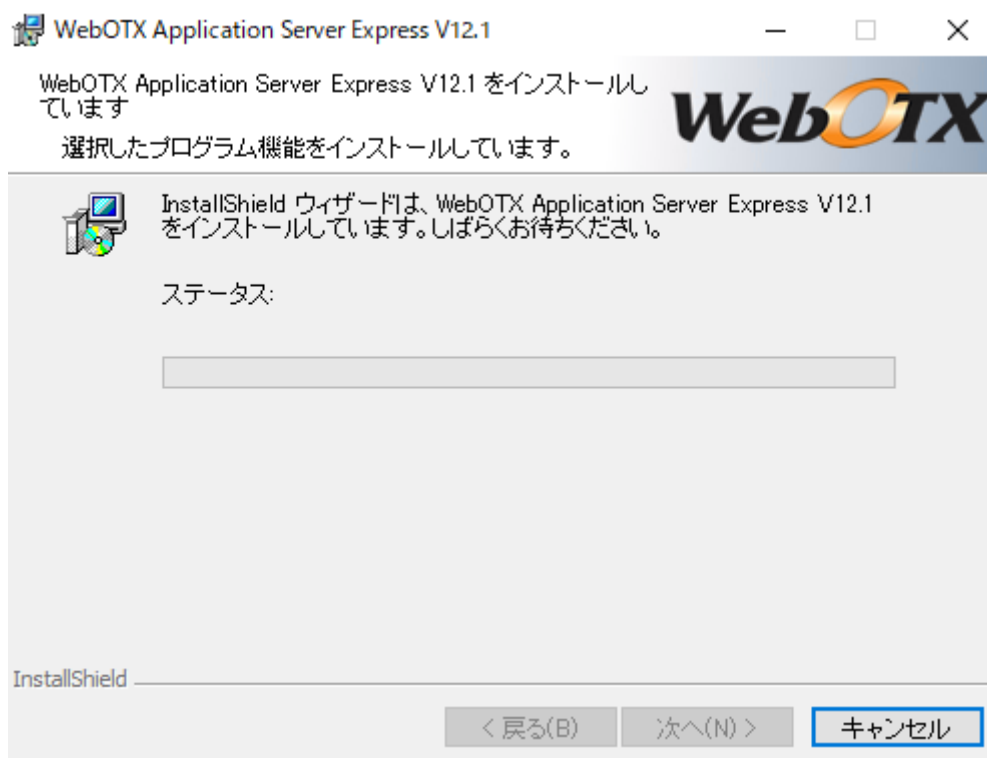
(8) [プログラムをインストールする準備ができました] 画面

設定を確認して問題ない場合、インストールを開始するため「インストール」ボタンを押してください。



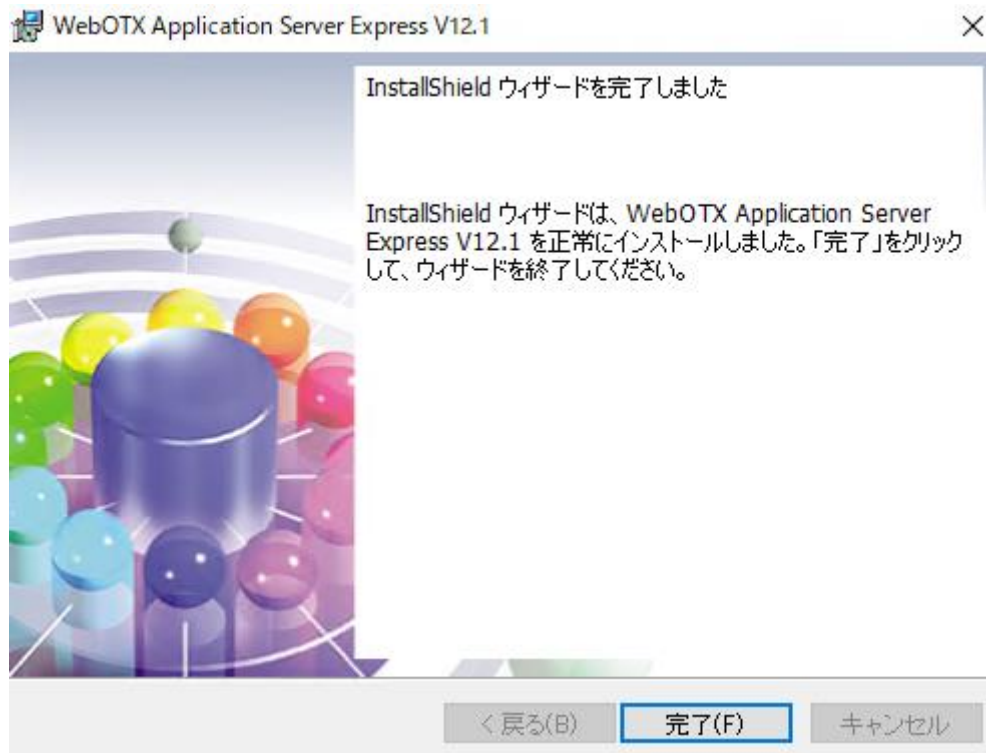
(9) **【WebOTX Application Server Express をインストールしています】 画面**

以下の画面が表示され、ファイルのコピーが始まります。選択された機能により、セットアップに必要な時間は異なります。ファイルのコピーが終了するまでお待ちください。

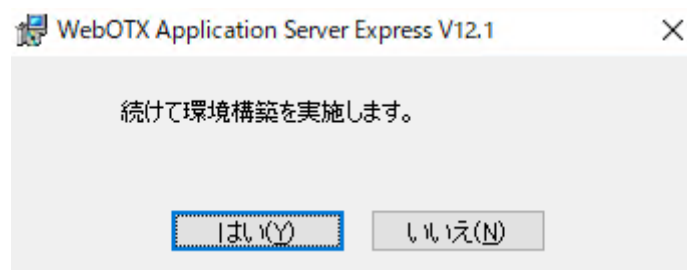


(10) **【インストールの完了】 画面**

次の画面が表示されたら「完了」ボタンを押してください。これでインストールは完了です。



「完了」ボタンを押すと以下のダイアログが表示されます。続けて環境構築を行う場合は「はい」、後で環境構築を行う場合は「いいえ」を押してください。



Caution

上記ダイアログ終了後に Windows Update による OS パッチ適用が必要なときなど OS 再起動のダイアログが表示される場合があります。インストールに続けて環境構築を行う場合、環境構築後に再起動を行うため、OS 再起動ダイアログはキャンセルしてください。キャンセルせず、OS を再起動する場合は次節の「環境構築」で(1)環境構築ツールの起動を手動で行ってください。

※OS 再起動後に環境構築ツールは起動されません。

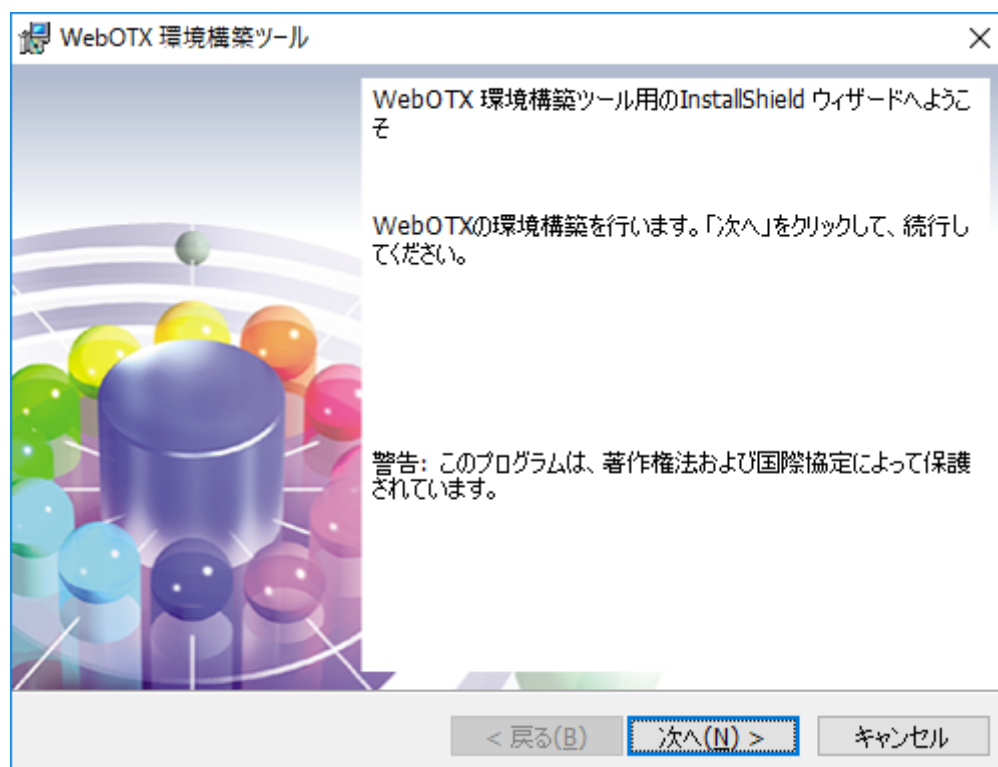
環境構築

(1) 環境構築ツールの起動

インストールから連続して環境構築を行う場合、本項の作業は不要なため(2)に進んでください。

環境構築ツール(WebOTX_config.exe)は<WebOTX インストールフォルダ>\bin 配下にインストールされています。Built-in Administrator ユーザか、管理者権限のあるユーザでも「管理者として実行」により環境構築ツールを起動してください。

(2) 環境構築ツールが起動し、以下の画面が表示されます。「次へ」ボタンを押してください。



環境構築ツールは起動時に、以下の順で JDK パスを検索します。

1. 別の WebOTX 製品のインストール時に指定された値
2. ユーザ環境変数「JAVA_HOME」に設定された値
3. システム環境変数「JAVA_HOME」に設定された値
4. レジストリ HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥JavaSoft¥Java Development

Kit¥CurrentVersion に記載の JDK のパス

OpenJDKのみインストールしているなど、上記のJDKパス検索で一致するものがない場合は以下のダイアログを表示します。JDKをインストールしていない場合、環境構築ツールを一旦終了してJDKをインストールしてください。既にJDKをインストールしている場合、「インストール済みのJDKフォルダ」ダイアログでOpenJDKなどインストール済のJDKのフォルダを指定してください。



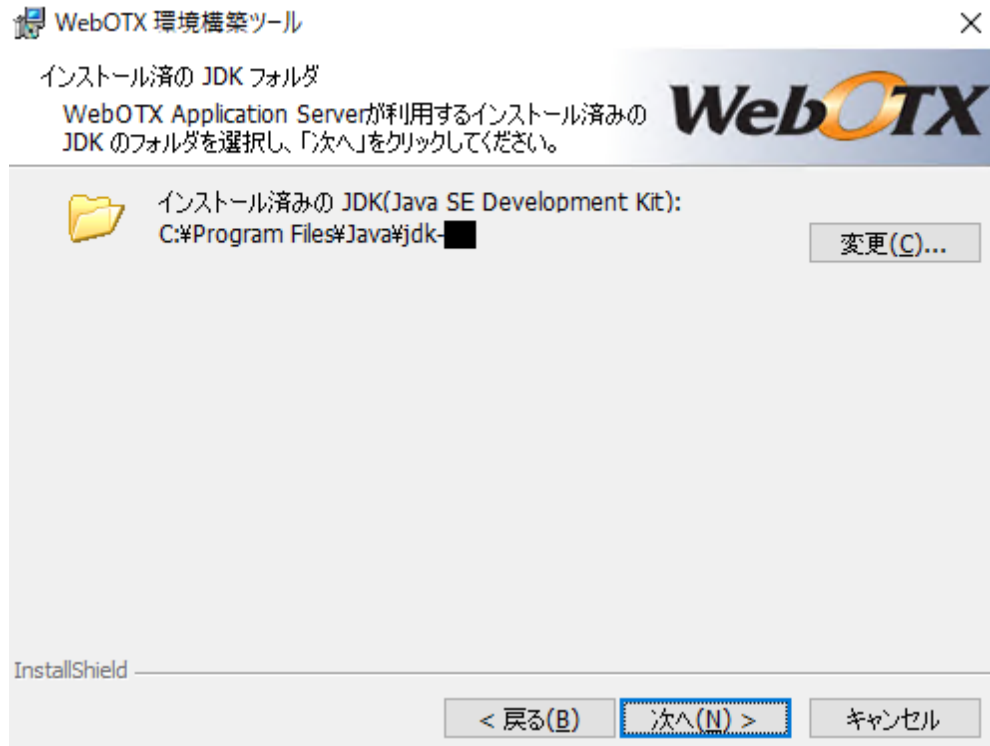
- (3) 環境構築の対象製品として「WebOTX Application Server」を選択し、「次へ」ボタンを押してください。
※インストールから連続して環境構築を行う場合、本項の画面は表示されないため(4)に進んでください。



- (4) 既にマシンにインストールされているJDKのフォルダを選択後、「次へ」ボタンを押してください。
環境変数「**JAVA_HOME**」を設定している場合には、その設定値が表示されます。

また、複数の JDK がインストールされている場合、最後にインストールした JDK のフォルダが表示されます。別のフォルダを選択する場合には「変更」ボタンを押してください。

※64bit 版の JDK がインストールされているフォルダを指定してください。それ以外のフォルダが指定されている場合は「次へ」ボタンが無効表示になりますので、正しく指定しなおしてください。



(5) トポロジ種別を選択し、「次へ」ボタンを押してください。

WebOTX Application Server と Web サーバを同じマシンで動作させる場合、「共存トポロジ」を選択してください。
→ (6)に進んでください。

WebOTX Application Server と Web サーバを異なるマシンで動作させ、かつ本マシンを Web サーバとして使用する場合、「分離トポロジ(Web サーバ)」を選択してください。→ (7)に進んでください。

WebOTX Application Server と Web サーバを異なるマシンで動作させ、かつ本マシンでアプリケーションを動作させる場合、「分離トポロジ(Web コンテナ)」を選択してください。→ (8)に進んでください。



- (6) トポロジ種別として「共存トポロジ」を選択した場合
 利用する Web サーバを選択し、「次へ」ボタンを押してください。



Apache HTTP サーバの場合、インストールディレクトリも設定してください。



IIS の場合、IIS サイト名も選択してください。



(7) トポロジ種別として「分離トポロジ(Web サーバ)」を選択した場合

利用する Web サーバを選択し、アプリケーションが動作する WebOTX Application Server への接続情報(ホスト名、AJP リスナのポート番号)を入力し、「次へ」ボタンを押してください。

WebOTX 環境構築ツール

Webサーバ種別

セットアップするWebサーバを選択して下さい

WebOTX Webサーバ

WebOTXにバンドルされているWebサーバ(Apache HTTP Server 2.4ベース)を使用する場合に選択します。

接続先ホスト名

接続先AJPリスナのポート番号(エージェントプロセス用)

8099

IIS

Windows OS付属のMicrosoft Internet Information Services (IIS)を使用する場合に選択します。

接続先AJPリスナのポート番号(プロセスグループ用)

20102

Apache HTTP Server

WebOTXにバンドルされていないApache HTTP Server ProjectのWebサーバを使用する場合に選択します。

InstallShield

< 戻る(B)

次へ(N) >

キャンセル

設定項目	説明
接続先ホスト名	アプリケーションが動作する WebOTX Application Server のホスト名または IP アドレスを入力します。
接続先 AJP リスナのポート番号 (エージェントプロセス用)	アプリケーションがエージェントプロセス上で動作する場合、接続先ホストのエージェントプロセス用の AJP リスナのポート番号を入力してください。
接続先 AJP リスナのポート番号 (プロセスグループ用)	アプリケーションがプロセスグループ上で動作する場合、接続先ホストのプロセスグループ用の AJP リスナのポート番号を入力してください。 (*接続先が WebOTX Application Server Express の場合は不要なため、入力値をクリアしてください。

Apache HTTP サーバの場合、インストールディレクトリも設定してください。なお、分散トポロジ(Web サーバ)かつ Apache HTTP サーバの場合は Web サーバの連携設定のみ行い、管理/ユーザドメインを作成しないため(12)に進んでください。

WebOTX 環境構築ツール

Webサーバ種別
セットアップするWebサーバを選択して下さい

WebOTX

☐ WebOTX Webサーバ
WebOTXにバンドルされているWebサーバ(Apache HTTP Server 2.4ベース)を使用する場合に選択します。

☐ IIS
Windows OS付属のMicrosoft Internet Information Services (IIS)を使用する場合に選択します。

☒ Apache HTTP Server
WebOTXにバンドルされていないApache HTTP Server ProjectのWebサーバを使用する場合に選択します。

接続先ホスト名

接続先AJプリミティブのポート番号 (エージェントプロセス用) 8099

接続先AJプリミティブのポート番号 (プロセスグループ用) 20102

Apache HTTP Server インストールディレクトリ 選択

C:\Apache24\

InstallShield

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

IIS の場合、IIS サイト名も選択してください。なお、分離ポログ(Web サーバ)かつ IIS の場合は Web サーバの連携設定のみ行い、管理/ユーザドメインを作成しないため(12)に進んでください。

WebOTX 環境構築ツール

Webサーバ種別
セットアップするWebサーバを選択して下さい

WebOTX

☐ WebOTX Webサーバ
WebOTXにバンドルされているWebサーバ(Apache HTTP Server 2.4ベース)を使用する場合に選択します。

☒ IIS
Windows OS付属のMicrosoft Internet Information Services (IIS)を使用する場合に選択します。

☐ Apache HTTP Server
WebOTXにバンドルされていないApache HTTP Server ProjectのWebサーバを使用する場合に選択します。

接続先ホスト名

接続先AJプリミティブのポート番号 (エージェントプロセス用) 8099

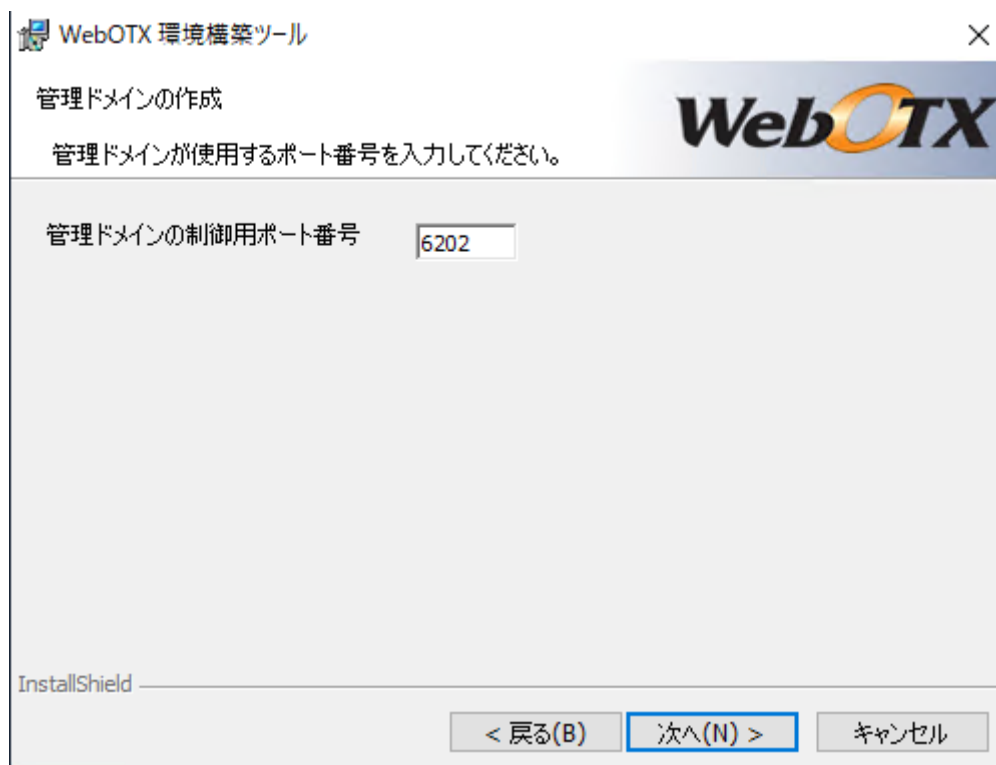
接続先AJプリミティブのポート番号 (プロセスグループ用) 20102

IISサイト名 Default Web Site ↓

InstallShield

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

(8) 管理ドメインの制御用ポート番号を既定値(6202)から変更する場合は設定し、「次へ」ボタンを押してください。



Caution

通常、ポート番号を変更する必要ありません。複数バージョンインストールしたマシンで両方のバージョンのドメインを同時に起動する場合のみ、対象マシンで未使用かつ他バージョンと重複しないポート番号を入力してください。

(9) ユーザドメインの作成方法を選択し、「次へ」ボタンを押してください。

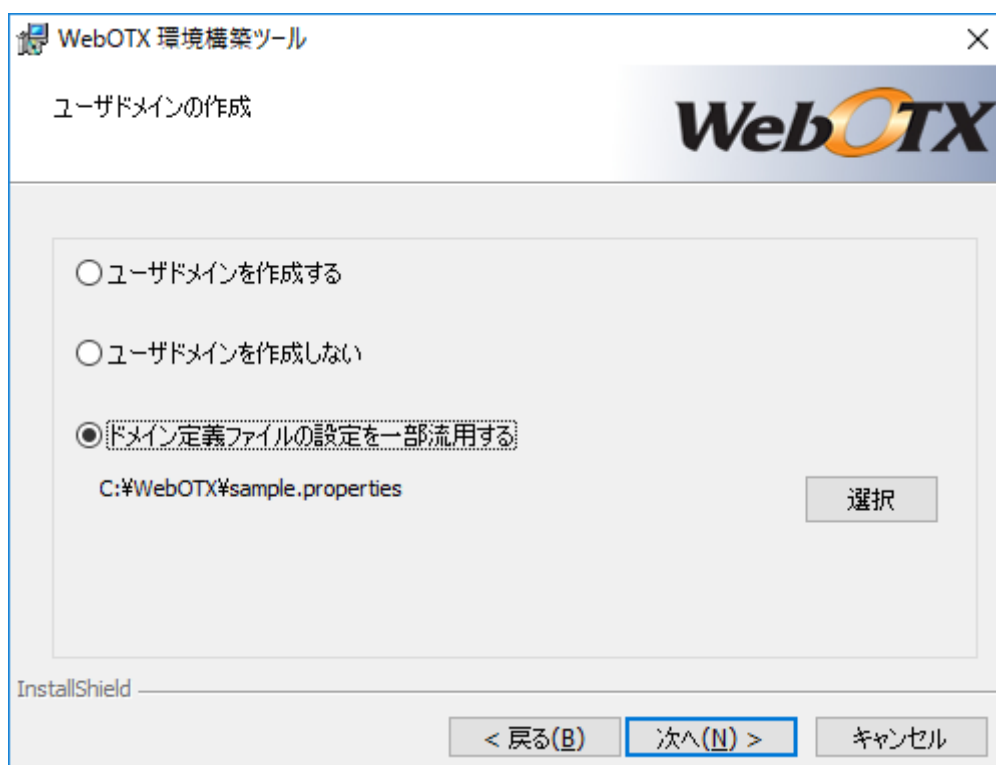
「ユーザドメインを作成する」を選択した場合、運用管理ドメイン(admin)とユーザドメインを作成します。

「ユーザドメインを作成しない」を選択した場合、運用管理ドメイン(admin)のみ作成します。環境構築完了後、運用管理コマンド(otxadmin.bat)を実行してユーザドメインを作成します。



「ドメイン定義ファイルの設定を一部流用する」を選択した場合、運用管理ドメイン(admin)とユーザドメインを作成し、ユーザドメインは指定されたドメイン定義ファイルの設定を一部流用(*)して作成します。既定値は<WebOTX インストールフォルダ>\¥ sample.properties です。

(*)環境構築ツールで設定可能な項目のみドメイン定義ファイルの設定を流用します。



- (10) ユーザドメインの情報(ドメイン名、各ポート番号)を設定し、「次へ」ボタンを押してください。既定値のまま環境構築を行う場合は設定を変更せず、そのまま「次へ」ボタンを押してください。 ※ポート番号の既定値は、V10 インストール時に作成するユーザドメインと同じです。



WebOTX 環境構築ツール

ユーザドメインの作成
ユーザドメイン名や使用するポート番号を入力してください。

ドメイン名

制御用ポート番号 管理コンソール用ポート番号

HTTPポート番号 HTTPSポート番号

AJPリスナポート番号(エージェントプロセス用) 組み込みIIOPリスナ用ポート番号

JMSサーバ用ポート番号 JMSサーバコネクション用ポート番号

JMS管理サーバコネクション用ポート番号 名前サーバ用ポート番号

IIOPリスナ用ポート番号 AJPリスナ用ポート番号(プロセスグループ用)

デバッグ用ポート番号

InstallShield

< 戻る(B) **次へ(N) >** キャンセル

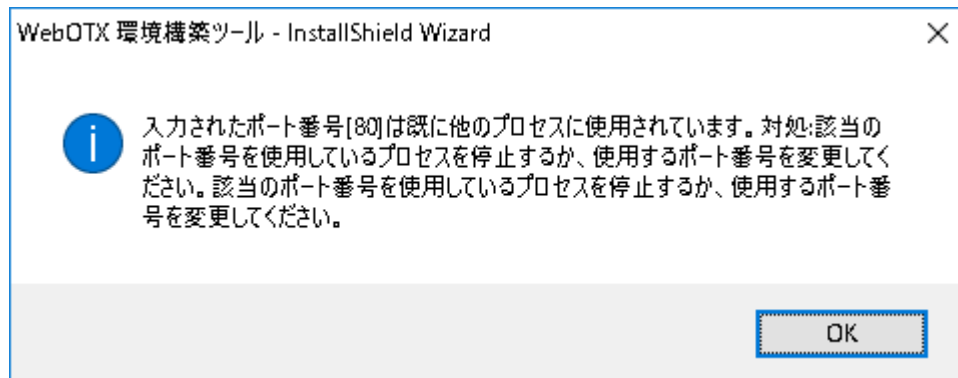
設定項目	説明
ドメイン名	ユーザドメイン名を指定します。デフォルト値は、domain1 です。ユーザドメイン名として使用できる文字列は、半角英数字と、ハイフン「-」、アンダーバー「_」であり、32 文字以内で指定します。ただし、「admin」の文字列は予約語であるため、ユーザドメイン名として指定できません。
制御用ポート番号	運用管理コマンドや統合運用管理ツールからの運用制御で利用するポート番号を指定します。デフォルト値は 6212 です。
管理コンソール用ポート番号	運用管理コンソールで利用するポート番号を指定します。デフォルト値は 5858 です。
HTTP ポート番号	ユーザドメインで利用する HTTP ポート番号を指定します。デフォルト値は 80 です。
HTTPS ポート番号	ユーザドメインで利用する HTTPS ポート番号を指定します。デフォルト値は 443 です。
AJP リスナのポート番号 (エージェントプロセス用)	エージェントプロセス用の AJP リスナのポート番号を指定します。デフォルト値は 8099 です。Web サーバとして内蔵 Web サーバを利用する場合、本ポートは使用されません。

組み込み IIOP リスナ用ポート番号	エージェントプロセス上で動作する組み込み IIOP リスナ(*)のポート番号を指定します。デフォルト値は 7780 です。
JMS サーバ用ポート番号	JMS プロバイダのポート番号を指定します。デフォルト値は 9700 です。
JMS サーバコネクション用ポート番号	JMS プロバイダの一般用コネクションサービスのポート番号を指定します。デフォルト値は 9701 です。
JMS 管理サーバコネクション用ポート番号	JMS プロバイダの管理用コネクションサービスのポート番号を指定します。デフォルト値は 9702 です。
名前サーバ用ポート番号	名前サーバのポート番号を指定します。デフォルト値は 2809 です。
IIOP リスナ用ポート番号	未使用です。
AJP リスナのポート番号 (プロセスグループ用)	未使用です。
デバッグ用ポート番号	未使用です。

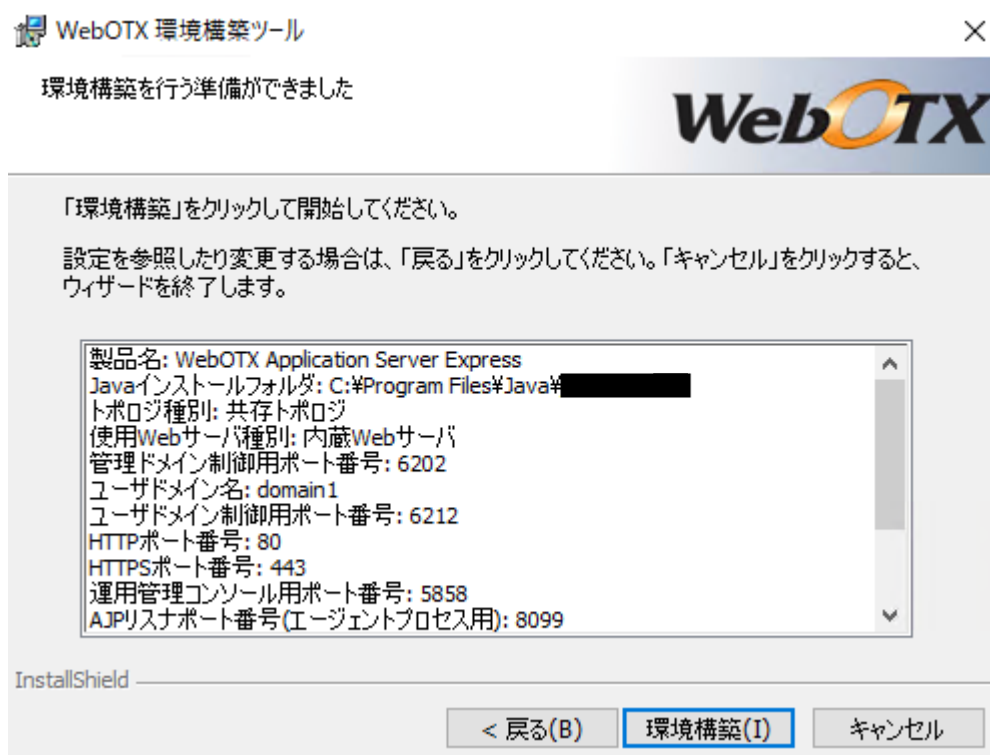
- (11) 事前検証の実施有無を選択し、「次へ」ボタンを押してください。



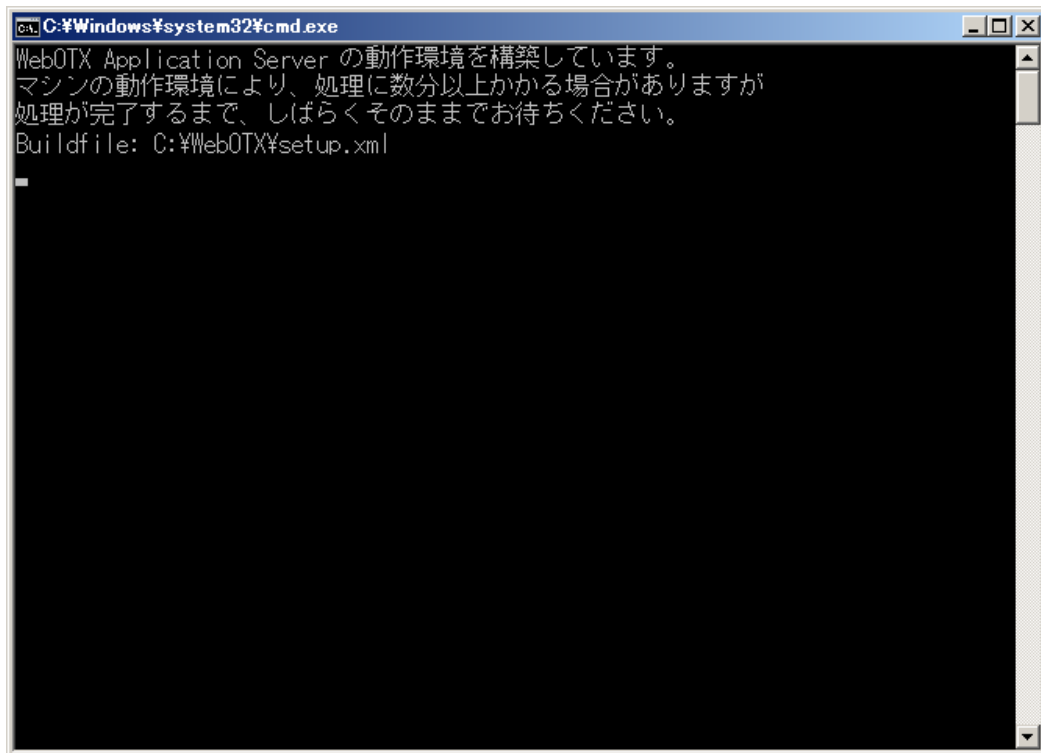
「事前検証を行う場合」を選択した場合、ドメインのポート番号の重複等の事前検証を行い、問題がある場合は以下のようなダイアログを表示します。※問題ない場合、ダイアログは表示されず次項の画面が表示されます。



- (12) 設定を確認して問題ない場合、環境構築を開始するため「環境構築」ボタンを押してください。



- (13) WebOTX の環境構築を行うため、以下の画面が表示されます。画面が終了するまでしばらくお待ちください。
環境構築の実行結果は、<WebOTX インストールフォルダ>\ant_setup.log で確認できます。



Caution

使用するJDKがJDK 17の場合、以下のWARNINGが表示されますが動作に影響ありません。

WARNING: A terminally deprecated method in java.lang.System has been called

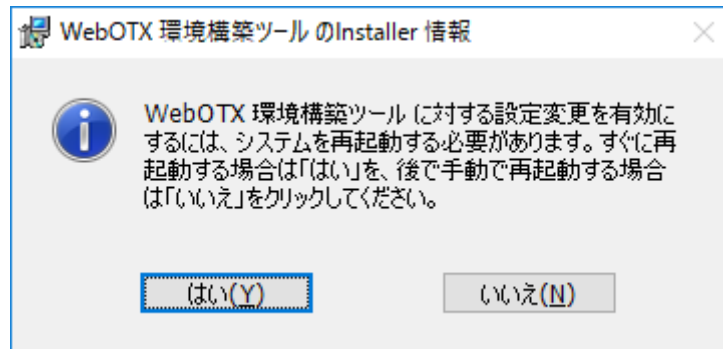
WARNING: System::setSecurityManager has been called by org.apache.tools.ant.types.Permissions
(file:/<WebOTX インストールフォルダ>/lib/ant/lib/ant.jar)

WARNING: Please consider reporting this to the maintainers of
org.apache.tools.ant.types.Permissions

WARNING: System::setSecurityManager will be removed in a future release

(14) インストールから連続して環境構築を行った場合、コンピュータを再起動してください。

※環境構築ツールを単独で起動した場合、以下のダイアログは表示されません。



環境構築後の作業

環境構築ツールは、環境構築中に WebOTX サービスを OS に登録します。それらは、OS 起動と共に開始するように設定されます。そのため、環境構築後にマシンを再起動すると、WebOTX のサービスが起動している状態になります。

- ドメインが正常に作成されているかを確認する

セットアップ中に作成された 2 つのドメイン「admin」と「ユーザドメイン」の動作状態を確認することによって、ドメインが正しく作成されていることを確認します。

- サービスの状態が「開始」であることを確認する。

WebOTX のサービスは、サービスマネージャを開いて状態確認することができます。表示名が次のサービスに対して確認してください。

WebOTX AS 12.1 Agent Service

- 運用管理コマンド「otxadmin」で WebOTX ドメインの動作状態を確認する。

Windows の[スタート]メニューから[すべてのプログラム]-[WebOTX 12.1]-[運用管理コマンド]をクリックします。プロンプト画面が表示されます。

プロンプト画面で、次の太文字部分のコマンドを入力します。

```
Use "exit" to exit and "help" for online help.  
otxadmin> list-domains
```

ユーザドメイン（以下の例では domain1）と admin が「running」状態になっていることを確認します。

```
List of domains:
```

```
admin running  
domain1 running
```

「exit」を入力して終了します。

```
otxadmin> exit
```

memo

Server Core の環境にインストールした場合はコマンドプロンプトより<WebOTX インストールフォルダ>\bin\otxadmin.bat を実行して運用管理コマンドを起動してください。

- 運用管理コンソールで WebOTX ドメインへ接続確認する。

「スタート画面」 - 「WebOTX 12.1」 - 「運用管理コンソール」をクリックします。Web ブラウザ画面が表示されます。

Caution

「2. 動作環境」の「ソフトウェア要件」に記載されたサポート対象のブラウザを使用してください。

ユーザ名: admin、パスワード: adminadmin を入力して、「ログイン」ボタンをクリックします。

ログインが成功し、ようこそ画面が表示されることを確認します。

画面右上の「ログアウト」ボタンをクリックすることでログアウトできます。

memo

Server Core の環境にインストールした場合は WebOTX AS をインストールしたマシンの Web サーバに接続できる任意の端末でブラウザを起動し、次の URL を入力してください。
`http://<WebOTX AS をインストールしたマシンのホスト名>:5858/`

WebOTX で利用するポート番号が起動済みの他のプログラムで利用しているポート番号と重複している場合、ドメインの起動に失敗します。

ドメインの起動に失敗した場合には、起動済みのプログラムの停止や、netstat コマンドなどを参照してポート番号の重複を解消してからドメイン再起動、またはドメインで利用するポート番号を変更して環境構築ツールを再実行してください。

- WebOTX が使用するポート番号を一時ポート対象範囲から除外する

WebOTX AS が使用するポート番号が OS の一時ポートの割り当て範囲と重複していた場合、WebOTX AS のサービスに定義されているポートが別のアプリケーションによって先に使用されることが原因で WebOTX の起動に失敗するなどの問題を引き起こすことがあります。

OS の一時ポートの範囲の既定値は「49152～65535」であり、ドメインを既定値で作成している場合、ポート番号は重複しません。

このため、OS の一時ポートの割り当て範囲とドメインが使用するポート番号が重複する場合のみ、以下の手順を実施してください。

1. Windows Server 2016 / 2019 / 2022 の場合は「スタート画面」 - 「Windows システムツール」 -

「コマンドプロンプト」を選択してコマンドプロンプトを起動し、次のコマンドを入力してください。

```
> netsh int ipv4 show dynamicport tcp
> netsh int ipv4 show dynamicport udp
```

2. 実行結果から、設定されている一時ポートの範囲を確認し、ドメインで使用するポートが範囲内に入っていないかを確認してください。

実行結果例)

プロトコル tcp の動的ポートの範囲

開始ポート : 49152
ポート数 : 16384

上記の場合、一時ポートの範囲は、49152～65536 となります。この範囲のポートをドメインが使用していないかを確認してください。

3. 手順1で、ドメインで使用するポートが、一時ポートの範囲内だった場合、一時ポートの範囲を変更します。以下のコマンドを実行し、ドメインで使用するポートが含まれないよう調整してください。

```
> netsh int ipv4 set dynamicport tcp start=XXXXXX num=YYYYY
> netsh int ipv4 set dynamicport udp start=XXXXXX num=YYYYY
```

XXXXXX には一時ポートの開始ポート、YYYYYY には一時ポートとして使用するポート数を設定してください。

● シャットダウンスクリプトの登録

WebOTX AS を起動した状態で OS のシャットダウンを行うと、OS により WebOTX AS のプロセスが強制終了され、イベントログに以下のような警告ログが出力されます。

OTX01205161: 予期せぬイベントにより、システム内部からアプリケーションサーバのシャットダウン要求が行われました。(com.nec.webotx.enterprise.system.core)

Handle the signal : SIGTERM(15) [<ドメイン名>]

この問題を回避するために Windows 標準のシャットダウンスクリプトの登録を行ってください。以下に手順を示します。

1. スクリプトの作成

以下の一行を内容として含むスクリプト woShutdown.bat を作成し、

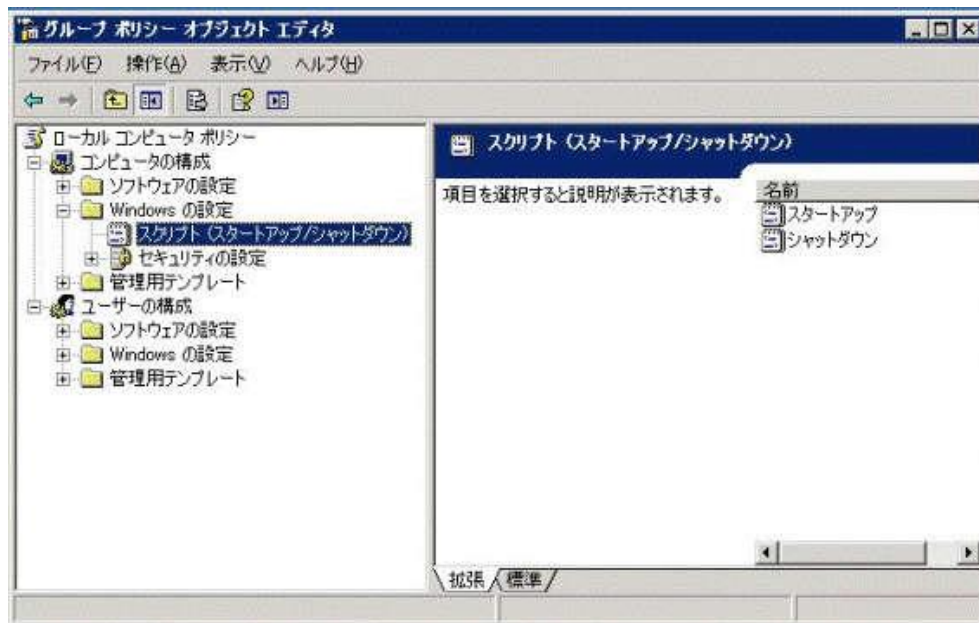
C:\WINDOWS\system32\GroupPolicy\Machine\Scripts\Shutdown または環境に合わせた誤って削除されることのない場所に保存します。

net stop WebOTXAS12.1AgentService

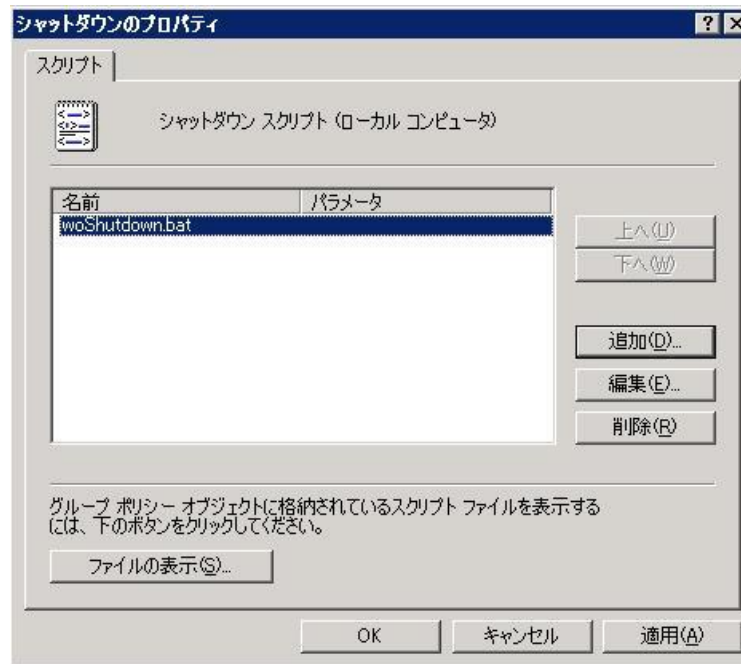
Caution

C:\WINDOWS\system32\GroupPolicy\Machine\Scripts\Shutdown は隠しフォルダになっています。

2. [ファイル名を指定して実行]から「gpedit.msc」を起動します。
3. 「グループポリシー」左ツリーの[ローカルコンピュータポリシー]-[コンピュータの構成]-[Windows の設定]-[スクリプト]を辿り、右画面に表示される「シャットダウン」右クリックメニューよりプロパティを選択します。



4. 「シャットダウンのプロパティ」の追加より先ほど作成したシャットダウンスクリプトを登録します。



「OK」ボタンを押し、ウィンドウを閉じてください。

- データベースを使用するための準備作業 (Java)

Java アプリケーションでデータベースを使用する場合には、各データベースで次の準備作業を行ってください。詳細については、各データベースのリファレンスマニュアルでご確認ください。

- Oracle での作業

- トランザクションのリカバリを行うためには、DBA_PENDING_TRANSACTIONS ビューの SELECT 権限が必要です。JDBC リソースを登録する際に、SELECT 権限を持つユーザを設定してください。JDBC リソースの登録を省略する場合には、トランザクション実行時に使用する JDBC データソースの定義で指定した全ユーザに対して、SELECT 権限を付与してください。
- JDBC データソースの設定で、データベースクラスタの使用有無[useDatabaseCluster]に true を設定した場合、または、次のバージョン以降の Oracle データベースを使用する場合、ユーザアカウントに sys.dbms_system パッケージへの EXECUTE 権限を付与してください。

Oracle Database 11g Release 2 (11.2.0.4)

- Microsoft SQL Server での作業

- SQL Server を使用するためには、SqlJDBCXAUser ロールの権限が必要です。トランザクション実行時に使用する JDBC データソースの定義で指定した全ユーザに対して、SqlJDBCXAUser ロールを付与してください。
- 未完了のトランザクションが存在する状態で Microsoft SQL Server を再起動すると、Transaction サービスからデータベースへの接続ができず、未完了トランザクションのリカバリを行うことができません。あらかじめ、Transaction サービスから接続するデータベースと、アプリケーションから接続するデータベースを分けるようにしてください。例えば、Transaction サービスでリカバリを行う際に使用するデータベースを master とし、アプリケーションが使用するデータベースを pubs としてください。

- 各 JDBC ドライバの分散トランザクション制御用のプログラムをインストールしてください。SQL Server JDBC Driver 3.0 / SQL Server JDBC Driver 4.0 は、SQL Server 2014 に接続することができます。SQL Server JDBC Driver 4.2 では、SQL Server 2016/ SQL Server 2017 / SQL Server 2019 に接続することができます。SQL Server JDBC Driver 7.4 では、SQL Server 2019 に接続することができます。SQL Server JDBC Driver 12.2 / SQL Server JDBC Driver 12.8.1 では、SQL Server 2022 に接続することができます。
- 接続時に SSL 暗号化に関するエラーが発生する場合は WebOTX オンラインマニュアルの「注意制限事項 > 機能ごとの注意制限事項 > JDBC データソース > Microsoft JDBC Driver for SQL Server バージョン 10.2 以降の利用について」を参照してください。

● ファイアウォールの設定に関して

ファイアウォールを設定している場合、クライアントマシンからの接続に使用するポート番号のブロックを解除する必要があります。インストール時に指定した HTTP/HTTPS ポート番号のブロックを解除してください。詳細は WebOTX オンラインマニュアルの[リファレンス > ファイアウォールへの例外設定]を参照してください。

● 複数のネットワークカードを利用している場合の設定

WebOTX AS が動作するサーバで複数のネットワークカードが有効になっている場合、運用管理コマンドおよび WebOTX Administrator 製品の中に含まれる統合運用管理ツールからドメインへの接続が失敗することがあります。これに該当する環境では、本項目の回避手順を実施してください。

【問題の詳細】

運用管理コマンドおよび統合運用管理ツールはドメインに接続する際に、既定では RMI プロトコルを利用して通信します。

RMI 通信では、ドメインの起動時に、RMI 通信用に IP アドレスとポート番号を埋め込んだスタブファイルを作成します。そして、運用管理コマンドや統合運用管理ツールから接続要求があると、作成しておいたスタブファイルをツールに送付します。スタブファイルを受け取ったツールは、スタブファイルに埋め込まれた IP アドレスとポート番号を利用してドメインと通信を行います。

WebOTX が動作するサーバに複数のネットワークカードが設定されている場合、既定では、スタブファイルに埋め込まれる IP アドレスは、いずれかのネットワークカードに設定されている IP アドレスとなります。このため、ツールから接続できない IP アドレスがスタブファイルに埋め込まれていると、接続に失敗することがあります。

この問題を回避するために、次の手順を実施して、スタブファイルに埋め込む IP アドレスを明示的に指定してください。スタブファイルに埋め込む IP アドレスとしてツールが接続できるものを指定することで、正常に接続できるようになります。

【回避手順】

1. 運用管理コマンドを立ち上げます。


```
otxadmin> list-domains
```

2. ドメインが起動できていることを確認します。
次のように表示されれば、起動できています。

```
List of domains:  
admin running  
domain1 running
```

3. 管理ドメイン(admin)にログインします。

```
otxadmin> login --user <管理ユーザ名> --password <管理ユーザパスワード> --port <管理ポート  
番号>
```

(*) 管理ユーザの既定値は、**admin**、パスワードの既定値は、**adminadmin**、管理ポート番号の既定値は、**6202** です。

4. 管理ドメインに対して、次のコマンドで **Java** システムプロパティを設定します。

```
otxadmin> create-jvm-options -Djava.rmi.server.hostname=<ホスト名、または、IP アドレス>
```

5. その他のユーザドメインに対しても、同じように手順 3、4 を繰り返して **Java** システムプロパティを設定します。

(*) 管理ユーザとパスワードの既定値は管理ドメインと同じです。管理ポート番号の既定値は、**6212** です。

6. WebOTX のサービスを再起動することにより、これらの設定が反映されます。

Caution

ドメインを新たに作成する場合は、作成したドメインに対しても上記の **Java** システムプロパティを設定してください。

お試し版ライセンスの残り利用期限の確認

お試し版はインストール後 **365** 日間利用可能です。ライセンスが無効となるまでの残り日数を確認したい場合には、次のコマンドを実行することで確認できます。

```
> cd <WebOTX インストールフォルダ>%share%\bin  
> OTXLLmt 2  
The time limit of Trial-License is xxx days.
```

利用可能日数が **xxx** に表示されます。この値が **0** になるか、または、コマンドの実行結果で「**No License.**」が表示された場合、お試し版のライセンスが無効となったことを意味します。この場合、お試し版のアンインストールを実行してください(*)。

- (*) お試し版のライセンスが無効な状態で、お試し版のアンインストールを実行すると、アンインストール処理の途中で「不正なライセンスコードです。」というダイアログが表示されますが、「**OK**」ボタンを押下して、そのま

まアンインストール処理を続行してください。

追加インストール

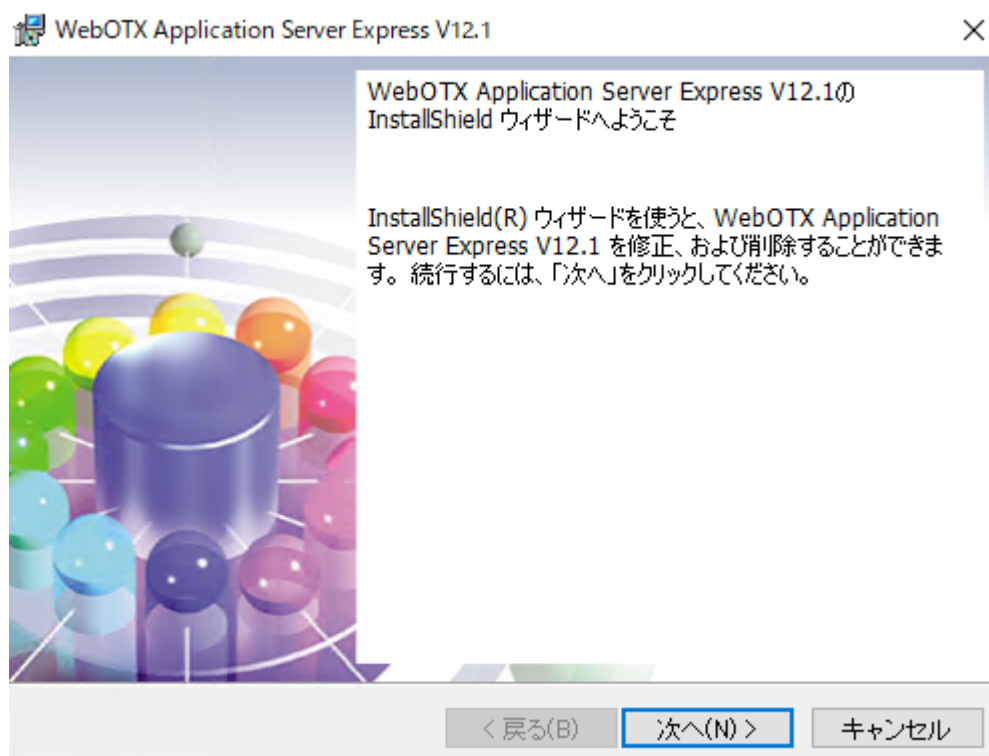
インストール時に選択しなかったオプション機能を以下の手順で追加インストールすることが可能です。

(1) 追加インストールの開始

ダウンロードした「WebOTX AS Express V12.1 お試し版」のファイル、「OTXEXP121.exe」を Built-in Administrator ユーザか、管理者権限のあるユーザでも「管理者として実行」によりインストーラを実行してください。

(2) [WebOTX Application Server Express のメンテナンス] 画面

Windows インストーラが起動し、「インストール準備中」というメッセージが表示されたあとに、次の画面が表示されます。「次へ」ボタンを押してください。



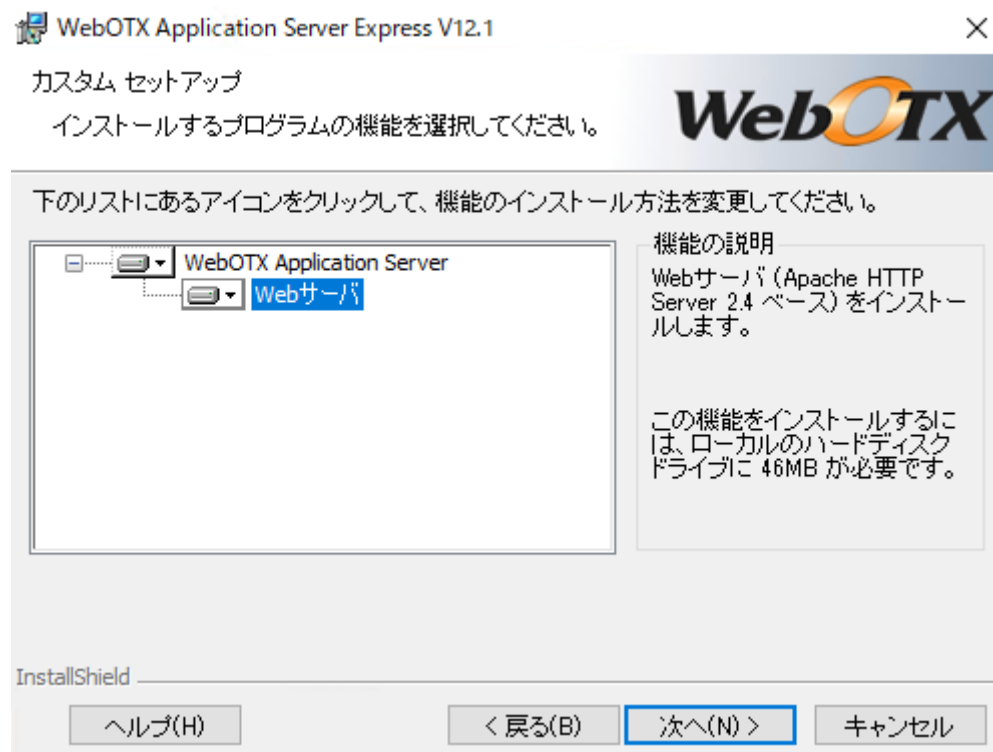
(3) [プログラムの保守] 画面

追加インストールを行うために「変更」を選択し「次へ」ボタンを押します。



(4) [カスタムセットアップ] 画面

追加インストールする機能を選択後、「次へ」ボタンを押してください。また、追加インストールする機能が既にインストール済の場合、「キャンセル」ボタンを押して終了してください。



リストにある各アイコンの意味は次のとおりです。

アイコン	説明
Web サーバ	WebOTX Web サーバ(Apache HTTP Server 2.4.xx ベース)をインストールします。(*1,2)

*1 追加インストール後に作成するユーザドメインで WebOTX Web サーバを利用することが可能となります。既に作成済のユーザドメインで WebOTX Web サーバを利用することはできません。

*2 バージョンの詳細("xx")は WebOTX Media の添付ドキュメントを参照。

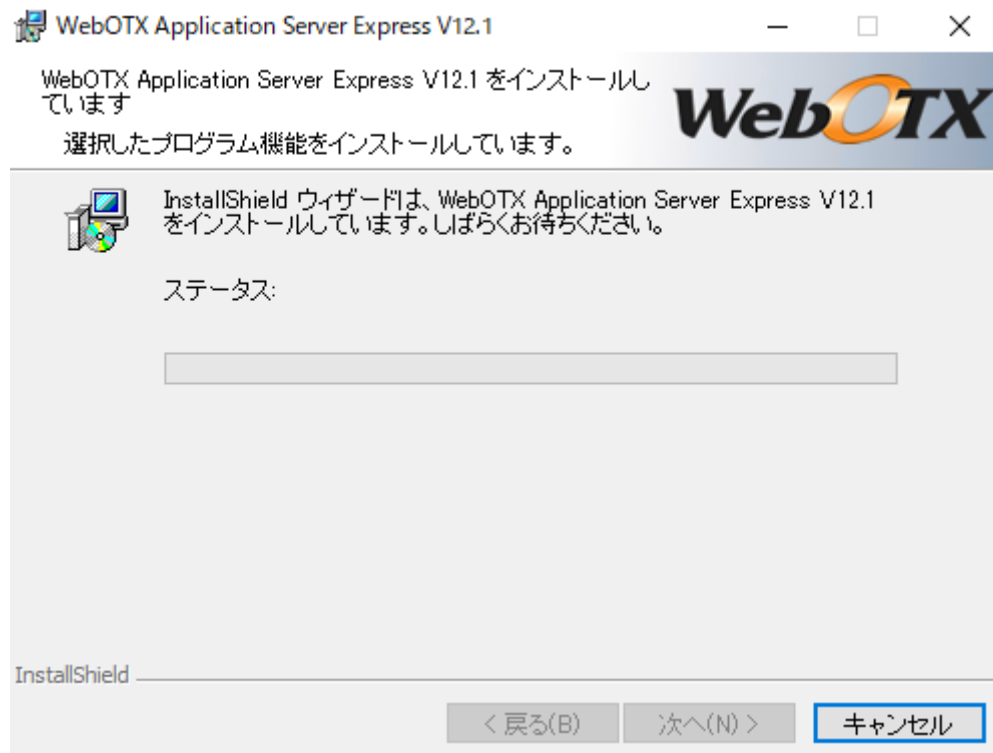
(5) [プログラムをインストールする準備ができました] 画面

追加インストールを開始するため「インストール」ボタンを押してください。



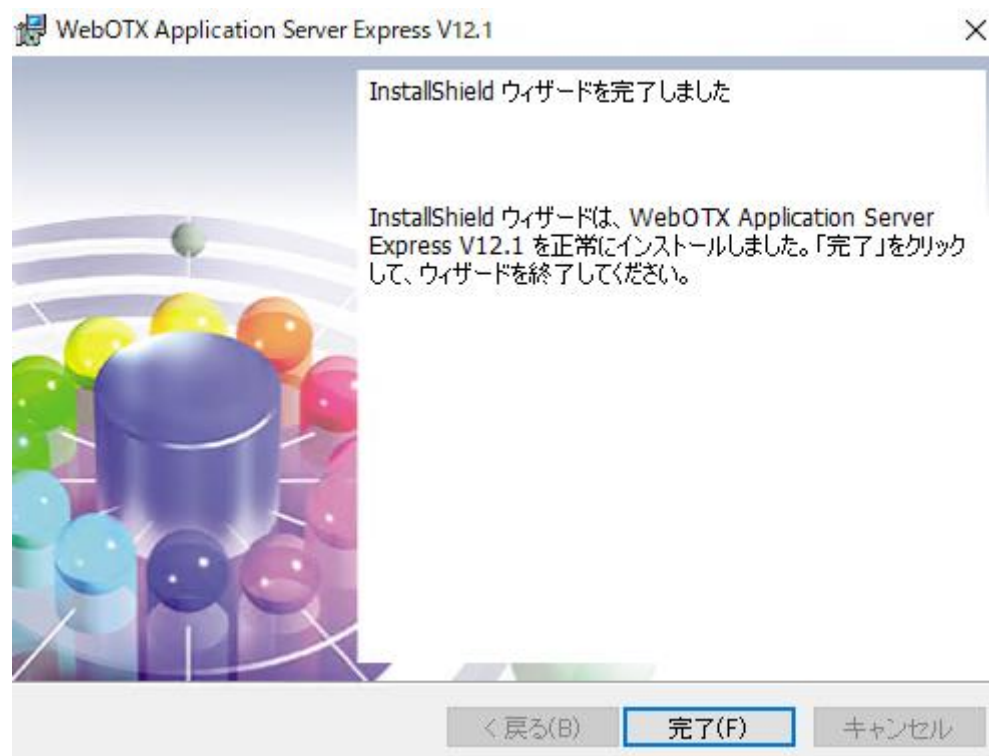
(6) [WebOTX Application Server Express をインストールしています] 画面

以下の画面が表示され、ファイルのコピーが始まります。選択された機能により、セットアップに必要な時間は異なります。ファイルのコピーが終了するまでお待ちください。



(7) [インストールの完了] 画面

次の画面が表示されたら「完了」ボタンを押してください。これで追加インストールは完了です。



4. アンインストール

アンインストール前の作業

(1) トランザクションの有無の確認

Transaction サービス利用時には、運用管理コンソールもしくは運用管理コマンドを使用して全てのトランザクションが終了していることを確認してください。トランザクションが残っている場合は全てのトランザクションを終了させてください。詳細についてはWebOTX オンラインマニュアルの[構築・運用 > ドメインの拡張機能 > Transaction サービス]を参照してください。

(2) WebOTX のアプリケーションが動作している場合はすべて停止してください。

(3) Web サーバの停止

IIS などの外部 Web サーバを使用している場合は、Web サーバを停止してください。停止方法は、各 Web サーバのマニュアルを参照してください。

(4) WebOTX サービスの停止

全ての WebOTX のサービスを停止します。Administrator 権限をもつユーザでログインし、「コントロールパネル」の「サービスマネージャ」で表示名が次のサービスが起動していれば停止してください。

WebOTX AS 12.1 Agent Service

※アンインストールに関する注意制限事項は「5. 注意制限事項」を確認してください。

アンインストール

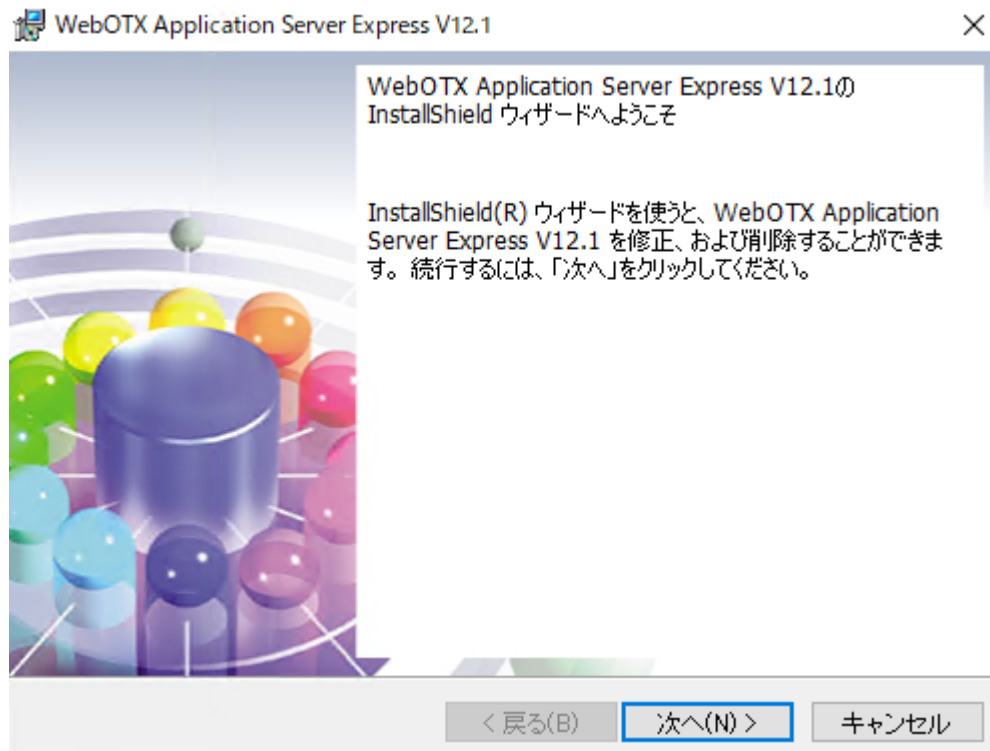
(1) アンインストールの開始

コントロールパネルの「プログラムと機能」から「WebOTX Application Server Express」を選択し、「変更」ボタンを押してください。

または、ダウンロードした「WebOTX AS Express V12.1 お試し版」のファイル、「OTXEXP121.exe」を Built-in Administrator ユーザか、管理者権限のあるユーザでも「管理者として実行」によりインストーラを実行してください。

(2) [WebOTX Application Server Express のメンテナンス] 画面

Windows インストーラが起動し、「インストール準備中」というメッセージが表示されたあとに、次の画面が表示されます。「次へ」ボタンを押してください。



(3) [プログラムの保守] 画面

アンインストールを行うために「削除」を選択し「次へ」ボタンを押します。



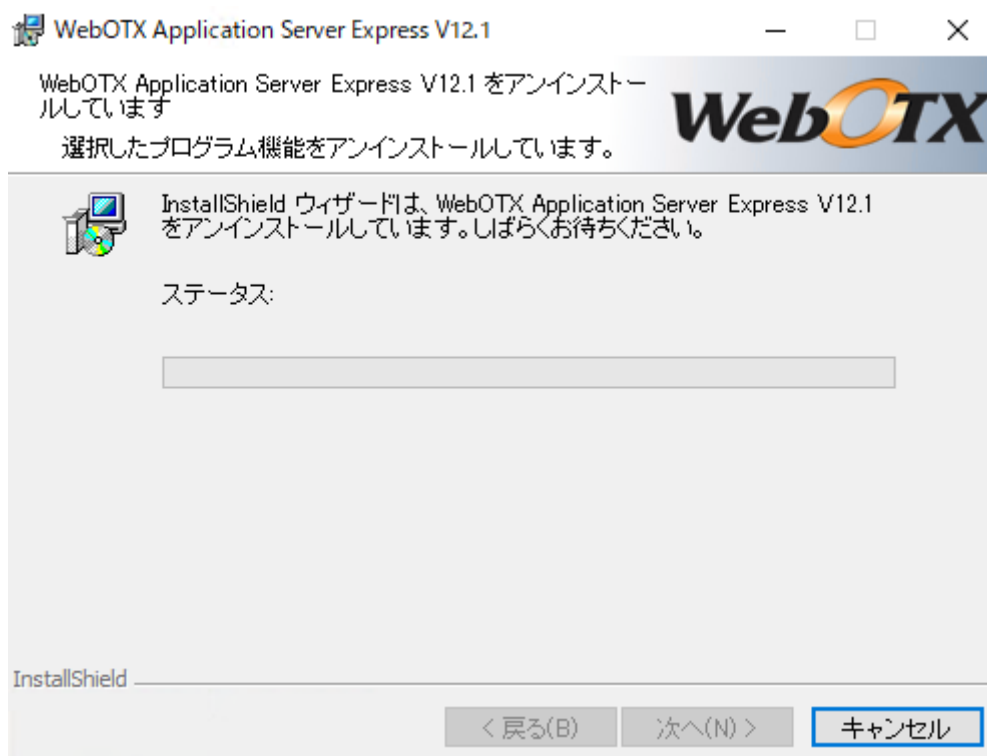
(4) [プログラムの削除] 画面

アンインストールを開始するため、「削除」ボタンを押します。



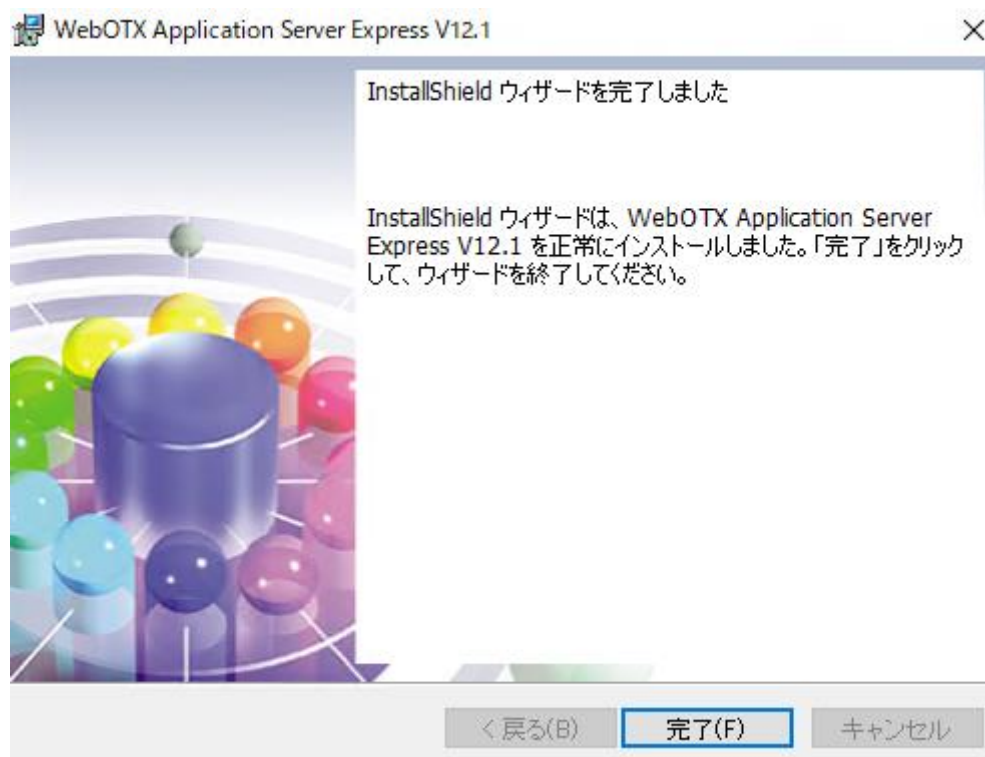
(5) [アンインストールしています] 画面

以下の画面が表示され、ファイルの削除が始まります。削除が終了するまで時間がかかりますので、しばらくお待ちください。



(6) [アンインストールの完了] 画面

次の画面が表示されたら、アンインストールは完了です。「完了」ボタンを押します。



アンインストール後の作業

(1) WebOTX の動作環境(ドメイン情報)ファイルの削除を行なってください。

WebOTX の動作環境(ドメイン情報)が残っている場合があります。これらのファイルは削除してもかまいません。

<WebOTX インストールフォルダ>¥(ユーザドメイン名).properties

(2) Windows ファイアウォールが有効な環境の場合、「コントロールパネル」－「Windows ファイアウォール」の「受信の規則」に登録されている 次の設定情報を削除してください。

なお、「WebOTX Web Server 2.4」は、「Web サーバ 2.4」のインストールを行った場合に 登録されます。

プログラムおよびサービス	登録内容
Java	<JDK インストールフォルダ>/jre/bin/java.exe
Java	<JDK インストールフォルダ>/bin/java.exe
Javaw	<JDK インストールフォルダ>/jre/bin/javaw.exe
Javaw	<JDK インストールフォルダ>/bin/javaw.exe

namesv.exe	<WebOTX インストールフォルダ>/ObjectBroker/bin/Namesv.exe
oad.exe	<WebOTX インストールフォルダ>/ObjectBroker/bin/oad.exe
WebOTX Web Server 2.4	<WebOTX インストールフォルダ>/WebServer24/bin/httpd.exe

(3) Web コンテナと外部 Web サーバとの連携の設定解除

Web コンテナと WebOTX Web サーバ以外の外部 Web サーバとの連携の設定を行った場合、WebOTX をアンインストールしても、外部 Web サーバには連携設定の内容が残っているため、その定義を削除しなければなりません。連携設定を解除せずそのまま Web サーバを使い続けた場合、システムによっては Web サーバが正常に起動しなくなる可能性があります。下記の作業を行ってください。

Web サーバごとの連携設定の解除方法を下記に説明します。

[IIS]

1. IIS マネージャを起動します。
2. 仮想ディレクトリの削除
連携していた「Web サイト」を展開し、仮想ディレクトリ「<ドメイン名>_webcont」を削除します。
3. ISAPI フィルタの削除
連携していた Web サイトのプロパティを開き、「ISAPI フィルタ」から「<ドメイン名>_webcont」を削除します。
4. 認証設定の変更
IIS の設定時に変更した基本認証の設定を必要に応じて変更してください。また、Web コンテナの認証ユーザを Windows システムに登録した場合、不要ならば Windows システムのユーザを削除してください。
5. ISAPI 制限の削除
IIS マネージャでサーバの階層を開き、「ISAPI および CGI の制限」から「<ドメイン名>_webcont」を削除します。

[Apache HTTP Server]

インストールディレクトリの conf ディレクトリ配下にある httpd.conf ファイルをエディタで編集します。「#TM_WS_PLUGIN-start」から「#TM_WS_PLUGIN-end」の記述を削除してください。

```
#TM_WS_PLUGIN-start
include "<WEBOTX_DOMAIN_HOME>/config/WebCont/mod_jk-24.conf"
#TM_WS_PLUGIN-end
```

(4) [他に同一メディアからインストールされている WebOTX 製品がない場合]

KEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\WebOTX\12.1\InstallInfo\Yesnecil

上記レジストリのキーの配下に値が存在しない、または名前が"000"の値のみで他は存在しない場合、以下の親レジストリのキーから削除してください。

※他にインストール済の WebOTX 製品があり、名前が"000"以外の値が存在する場合は削除しないでください。

KEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\WebOTX\12.1\InstallInfo

これでアンインストール作業は完了です。

5. 注意制限事項

- 試用期間の 365 日を経過するとドメインの起動に失敗します。
 - 運用管理コマンドから起動した場合
start-domain コマンド実行後、以下のメッセージが表示され、ドメインの起動に失敗します。

「com.nec.webotx.enterprise.admin.servermgmt.DomainException: Your license is invalid.
Please obtain a valid license for server.」
 - サービスから起動した場合
Windows サービス上は起動完了と表示されますが、サービス開始後、<WebOTX インストール先>\logs\WOAgentSvc_start.log ファイルに以下のメッセージが表示され、ドメインの起動に失敗します。

「com.nec.webotx.enterprise.admin.servermgmt.DomainException: Your license is invalid.
Please obtain a valid license for server.」
- コンピュータの再起動
インストールおよび環境構築後に運用を始める場合には、必ずコンピュータを再起動してください。コンピュータを再起動しないと、本製品は正常に動作しません。
- アンインストールは、必ず Administrators グループに所属した管理者権限があるユーザで実行してください。
- アンインストール後の不要なファイルの削除
アンインストール時に、インストールフォルダにディレクトリやファイルが残る場合があります。アンインストール完了後、すべて削除してください。
-
- スタートメニューの「運用管理コンソール」へのショートカット
環境構築時にユーザドメインの管理用コンソール用ポート番号をデフォルト値(5858)から変更した場合、スタートメニューの「運用管理コンソール」へのショートカットには反映されません。
以下のショートカットのプロパティを表示し、[Web ドキュメント]タブの[URL]のポート番号を環境構築時に指定した値に変更してください。

<WebOTX インストールフォルダ>\bin\AdminConsole.url

その他の注意制限事項に関してはマニュアルを参照して下さい。